

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 30 日現在

機関番号：31304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2008～2011

課題番号：20720241

研究課題名（和文） 文化の資源化と活用の論理  
—地方競馬の衰退を背景とした「馬事文化」の創出—研究課題名（英文） The logic of Cultural Resourcing and Its Application: Creating a  
Culture of Equine Affairs from the Decline of Local Horse Racing

研究代表者

安藤 直子 (ANDO NAOKO)

東北福祉大学・総合福祉学部・准教授

研究者番号：40405907

研究成果の概要（和文）：

これまで遺伝資源としてまた文化資源として保護されてきた農用馬や在来馬を、保護に止まらず積極的に活用することを求める日本馬事協会の方針転換により、生産・飼養者が「生きた文化財」としての馬の価値を捉え直し、文化財に経済的な価値を付与する様相を分析した。特に天然記念物としての在来馬を文化財保護制度の枠組みの中で活用する際に生じる様々な問題を分析し、文化を資源化し活用する際の主体の戦略を考察した。

研究成果の概要（英文）：

This study analyzes how breeders have altered their views on the value of horses as “living cultural assets” by adding economical elements to such value, in response to the policy changes of the Japan Equine Affairs Association. This policy change has shifted from the position of simply protecting agricultural and native horses, viewed as genetic and cultural resources, to one of actively putting these horses to practical use. The analysis particularly focuses on the problems that arise with application of wild native horses (a protected species) within the framework of the cultural asset protection system, and discusses the strategies of the main constituents (i. e., breeders) when applying this cultural resourcing.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 20 年度	700,000	210,000	910,000
平成 21 年度	600,000	180,000	780,000
平成 22 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学、民俗学

キーワード：文化資源、保存と活用、農用馬、在来馬、天然記念物、価値

## 1. 研究開始当初の背景

日本馬事協会を中心とした馬の生産に関わる主要組織は、中央競馬会からの助成によって、農用馬や在来馬の生産・飼養者に繁殖や品種管理を目的とした支援を継続してきたが、競馬事業収益の減収により助成が減額されたことで、保護を目的とした支援から活用を目的とした活動を中心に支援することへ方針を転換した。そのため、生産・飼養者はこれまで採算が得られなくとも補助を得て飼養してきた農用馬や在来馬に、自ら付加価値を付けて販売し、生業として成り立たせることを期待されている。

しかしながら農作業の機械化や輸送技術の進歩により現代社会における馬の用途は消失し、食用または乗用としてわずかな需要があるのみであり、馬を活用し経済的な利益を生み出すことは現実には難しい。

また現状では、農用馬の生産振興を目的とした組織や、在来馬の保存会を窓口とした一括支援が行われているが、馬の生産飼育に携わる理由や馬との関わり方は地域や品種、さらには個人によっても異なり、活用の状況も異なっている。そのため、従来の画一的な保護策ではなく、地域や品種ごとの現状を把握し、個々の生産者が抱える現実に即した支援の仕組みを検討することが必要とされている。

## 2. 研究の目的

本研究においては、これまで遺伝資源また文化資源として保護されてきた農用馬や在来馬を従来と異なる用途で活用し、新たに経済的な価値を生み出そうとする試みの中で、生産・飼養者が抱える諸問題を分析し、文化的価値と経済的価値の関係や文化資本概念の再考を試みることを目的とする。

主に、(1) 輸入肉用馬の増加に伴い市場価格が低迷し採算を得ることが難しい農用馬

の生産・飼育と、(2) これまで文化財保護制度によって保護することを求められてきた天然記念物としての在来馬の生産・飼育者が、文化的価値を主張しながら経済的価値を生み出そうとする際の戦略と、そこで主張される論理を検討する。

また、農用馬や在来馬の活用を求められる生産・飼養者が抱える問題を分析し、農林水産省や日本馬事協会が提示する現在の馬の生産補助の仕組み、日本中央競馬会、地方競馬全国協会を中心とした生産飼育の支援の仕組みを分析し、現実に即した支援のシステムを検討するための基礎研究とする。

## 3. 研究の方法

(1) 参与観察・当事者へのインタビューにより、詳細な現地調査のデータを収集することを主要な方法とした。

主に農用馬・在来馬の生産・飼養者を対象とした聞き取り調査を実施し、他に馬の改良、保護、利活用の増進、文化継承等を目的とする関係諸機関、自治体担当課、生産管理施設においてもインタビューを実施した。

(2) また、政府や自治体、関係諸機関が推進する馬に関する政策・事業について公開されている多様なデータを収集した他、馬に関する統計資料を収集し分析した。

(3) さらに、馬の生産や繁殖改良、競馬、馬に関する祭り・信仰についての文献資料を多様な領域から収集し分析した。

## 4. 研究成果

農用馬及び在来馬の生産・飼養者が文化を活用し、経済的価値を生み出すプロセスを検討したところ、以下の点が明らかになった。

(1) 廃止が検討されている地方競馬や採算

を得ることが難しい農用馬生産の現場では、馬を飼いつけることの必要性を主張するため「馬事文化」という新たな文化の枠組みが創出され、馬に関するあらゆる文化を一括りに資源化しようとする動きがみられる。

明確な実態を伴わず、当事者の思惑のズレの中で構成されている「馬事文化」という文化の枠組みを、実態を帯びた文化として多様な手法を用いて表現し、馬や馬を飼うことの必要性を社会に提示しようと試みていることの詳細を明らかにした。

- (2) 農用馬に関しては、①祭礼等のイベントへの活用と、②馬肉消費の拡大という、2つの活用に向けた取り組みを対象に調査を実施した。

祭礼・イベント等への活用については主に熊本県熊本市の藤崎八幡宮秋季例大祭、岩手県盛岡市・滝沢村のチャグチャグ馬コを対象として、飼育の委託や貸借のシステム、調教方法など、農用馬の祭りやイベントへの活用状況を調査した。

また、生産者に加えて、肥育農家や馬肉業者等を対象に、馬肉の消費拡大に向けた取り組みを調査し、当事者が新たな活用策を模索する中で、馬との関係や馬と関わり続ける自分自身の営みについて捉え直していること、馬を飼養しながら現地では消費しない岩手県と、馬肉消費が盛んな熊本県では農用馬との関わり方や資源としての馬の捉え方が異なり、文化的な価値や経済的な価値を生み出す手法や主張される論理が異なることがわかった。

- (3) 在来馬については、主に①国の天然記念物である宮崎県串間市の御崎馬、②愛媛県今治市の天然記念物である野間馬、③沖縄県八重山郡与那国町の天然記念物である与那国馬を中心に現地調査を実施し、遺伝資源であり文化財でもある在来馬を、保存に止まらず積極的に活用することを求める、日本馬事協会を中心とした方針転換をきっかけに、生産現場に生じた問題を分析した。

在来馬に関しては、これまでも保存会

を窓口とした支援が実施されてきたが、今後は生産保護を目的とした支援ではなく、具体的な活用策を提示した保存会に対し補助する仕組みへ移行することが模索されている。そのため、全国乗馬倶楽部振興協会による在来馬乗用化推進事業を通じて、在来馬を調教し全国の乗馬クラブへ販売するなど、積極的に新たな活用策を生み出す保存会も存在する。

その一方、生産・飼養者の間にはこれまで「継承すべき貴重な『文化』」として、在来馬を保護する役割を付与されながら、補助を減額され、自ら経済的な負担を強いられることに矛盾を感じ、生産・飼育を止めざるを得ないと考える人も現れ始めている。

これまで生育環境も含めて価値付けられ、その環境の中で保護することを求められてきた在来馬を土地から切り離すことで、従来の在来馬の価値を保つことができるのか、文化財としての在来馬に経済的な価値の指標が持ち込まれたことによる混乱も生じている。

在来馬を文化財という位置付けに据えたまま、活用し経済的な価値を生み出す際に生産・飼養者が抱える様々な問題が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 安藤直子、天然記念物の活用における価値の変化、東北福祉大学研究紀要、査読有、35巻、2011年、pp.365-377
- ② 安藤直子、資源化される祭り、東北福祉大学研究紀要、査読有、34巻、2010年、pp.267-283

[図書] (計1件)

- ① 安藤直子(編)『動物と人との関係の再構築』、ハリウコミュニケーションズ、2009年、(全66頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

安藤直子 (ANDO NAOKO)

東北福祉大学 総合福祉学部 准教授

研究者番号：40405907

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし